



TITLE:

# 複素空間形内の余次元2のアインシュタインケーラー部分多様体(リーマン多様体とリー群)

AUTHOR(S):

塚田, 和美

---

CITATION:

塚田, 和美. 複素空間形内の余次元2のアインシュタインケーラー部分多様体(リーマン多様体とリー群). 数理解析研究所講究録 1985, 576: 100-120

ISSUE DATE:

1985-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/99248>

RIGHT:

## 複素空間形の余次元 2 のアインシュタイン ケーラー部分多様体

新潟大理学部 塚田和美 (Kazumi Tsukada)

$M^m(\tilde{c})$  を  $m$  次元複素空間形 即ち 定正則断面曲率  $\tilde{c}$  をもつ単連結完備な Kähler 多様体とする。 $\tilde{c} > 0$  の時には Fubini-Study 計量の入った複素射影空間  $P_m(\mathbb{C})$  であり,  $\tilde{c} = 0$  の時には通常の Hermite 内積の入った複素 Euclid 空間  $\mathbb{C}^m$  であり,  $\tilde{c} < 0$  の時には Bergmann 計量の入った  $\mathbb{C}^m$  内の単位開球  $D^m$  である。

$M^m(\tilde{c})$  内の Kähler 部分多様体とは,  $M^m(\tilde{c})$  内の複素部分多様体であり, 外側の Kähler 計量から導入された計量をもつものとする。ここで考えたいのは, 特にこの導入された Kähler 計量が Einstein となるものである。 $\tilde{c} > 0$  の時, そのような例を手えよう。 $M$  をコンパクト型既約 Hermite 対称空間とすると, 各自然数  $k$  に対応して,  $(M, g_k)$  から  $P_{m(k)}(\mathbb{C})$  への正則等長埋め込みが存在する。ここで  $g_k$  は対称空間となる計量を適当に相似変形したものである。これらはすべて Einstein Kähler 部分多様体の例になる。特に 複素

2次超曲面と呼ばれるもの  $Q_n(\mathbb{C})$  は 複素射影空間の超曲面として次のように実現されている。

$$Q_n(\mathbb{C}) = \{ z = [z_0, z_1, \dots, z_{n+1}] \in P_{n+1}(\mathbb{C}) ; z_0^2 + z_1^2 + \dots + z_{n+1}^2 = 0 \} \subset P_{n+1}(\mathbb{C})$$

ここで  $z_0, z_1, \dots, z_{n+1}$  は  $P_{n+1}(\mathbb{C})$  の斉次座標である。

もっと一般に、複素射影空間内の等質 Kaehler 部分多様体については完全に決定されており、その中で Einstein となるものは数多く存在する。それ以外の複素射影空間内の Einstein Kaehler 部分多様体の例は知られていないのは注目すべき事実である。

次のような問題が自然に考えられる。

問題： 複素空間内の Einstein Kaehler 部分多様体を決定せよ。

この問いに対する接近のしかたはいろいろあると思うが、ここでは余次元の低いものについてはどうかという観点から見てみよう。

余次元 1 即ち超曲面の場合には、B. Smyth [4] S.S. Chern [1] によ、2次の結果が知られている。

定理  $M^n \hookrightarrow \check{M}^{n+1}(\mathbb{C})$  Einstein Kaehler 部分多様体

$\Rightarrow c > 0$  の場合:  $M$  は totally geodesic または  $P_{n+1}(\mathbb{C})$  内の  $Q_n(\mathbb{C})$  に局所合同。

$c \leq 0$  の場合:  $M$  は totally geodesic

余次元 2 の場合に 次の結果を得た。

定理  $M^n \subset \tilde{M}^{n+2}(\tilde{c})$  Einstein Kaehler 部分多様体

$\Rightarrow \tilde{c} > 0$  の場合:  $M$  は totally geodesic

または  $Q_n(\mathbb{C}) \subset P_{n+1}(\mathbb{C}) \subset P_{n+1}(\mathbb{C})$  なる  $Q_n(\mathbb{C})$   
totally geodesic  
に局所合同。

$\tilde{c} \leq 0$  の場合:  $M$  は totally geodesic

以下の論説では上の定理の証明を手えよう。

注意 定理の仮定を Einstein から Ricci tensor が平行という条件に弱めた時には, 定理の結論に  $P_2(\mathbb{C})$  内の  $P_1(\mathbb{C}) \times P_1(\mathbb{C})$  の開部分多様体を加わるだけである。 $P_1(\mathbb{C}) \times P_1(\mathbb{C})$  の  $P_2(\mathbb{C})$  への埋め込みは次式で与えられる:

$$(z_0, z_1, w_0, w_1, w_2) \longrightarrow (z_0 w_0, z_0 w_1, z_0 w_2, z_1 w_0, z_1 w_1, z_1 w_2),$$

ここで  $(z_0, z_1), (w_0, w_1, w_2)$  はそれぞれ  $P_1(\mathbb{C}), P_2(\mathbb{C})$  の齊次座標である。(H. Nakagawa and R. Takagi [2] 参照)。

### 1. 準備

複素空間形内の Kaehler 部分多様体について, 基礎的事

項を述べよう。詳しくは K. Ogino [3], H. Nakagawa and R. Takagi [2] を参照。  $M$  を  $\tilde{M}^m(\mathbb{C})$  内の  $n$ -dim Kaehler 部分多様体とする。 $J, \langle, \rangle$  を  $\tilde{M}$  の複素構造及び Kaehler 計量,  $R$  を  $M$  の曲率テンソルとする。 $T_p M$  を  $p$  における接空間,  $T_p M^{\mathbb{C}}$  を  $M$  の複素化とし,  $J, \langle, \rangle, R$  等は  $T_p M^{\mathbb{C}}$  に複素線形に拡張しておく。 $T_p M^{\mathbb{C}}$  の部分空間  $T_p M^{\pm}$ ,  $T_p M^{\mathbb{C}}$  上の Hermite 内積  $(,)$  を次で定義する:

$$T_p M^{\pm} = \{ x \in T_p M^{\mathbb{C}} ; Jx = \pm \sqrt{-1} x \}$$

$$(x, y) = \langle x, \bar{y} \rangle \quad x, y \in T_p M^{\mathbb{C}},$$

ここで  $x \rightarrow \bar{x}$  という対応は  $T_p M^{\mathbb{C}}$  内の  $T_p M$  に関する複素共役を表す。

この時次が成立する:

$$\overline{T_p M^{\pm}} = T_p M^{\mp}$$

$$T_p M^{\mathbb{C}} = T_p M^{+} + T_p M^{-} \quad (\text{Hermite 内積 } (, ) \text{ に関する直交直和}).$$

$p$  における埋め込みの法空間を  $N_p M$  と表し,  $N_p M$  の複素化を  $N_p M^{\mathbb{C}}$  とする。 $N_p M^{\mathbb{C}}$  について上記のことが同様に成立する。

埋め込みの第 2 基本形式を  $h^2 \in C^{\infty}(\text{Hom}(\otimes^2 TM, NM))$  とする。

$h^2$  から高階の基本形式  $h^j \in C^{\infty}(\text{Hom}(\otimes^j TM, NM))$  ( $j \geq 3$ ) を次のようにして帰納的に定義する:

$$h^{j+1}(x_1, \dots, x_j, x_{j+1}) = \nabla_{x_{j+1}}^{\perp} h^j(x_1, \dots, x_j) - \sum_{k=1}^j h^j(x_1, \dots, \nabla_{x_{j+1}}^{\perp} x_k, \dots, x_j)$$

$$x_k \in T_p M,$$

ここで,  $X_k$  は  $(X_k)_p = x_k$  とする  $p$  の近傍で定義された  $M$  上の滑らかなベクトル場で,  $\nabla^+$ ,  $\nabla$  はそれぞれ法バンドル  $NM$  接バンドル  $TM$  上の法接続, Riemann 接続を表す。

$h^j$  も複素線形に拡張して,  $\text{Hom}(\otimes^j TM^{\mathbb{C}}, NM^{\mathbb{C}})$  の smooth section になるようにしておく。以後添字の  $j$  を省略して単に  $h$  と書くことにする。この時次が成立する:

$$h(x_1, x_2, \dots, x_j) \in N_p M^+ \quad \text{for } x_1, x_2 \in T_p M^+, x_3, \dots, x_j \in T_p M^{\mathbb{C}}.$$

複素空間形  $\tilde{M}^m(\mathbb{C})$  の Kähler 部分多様体については次の諸公式が成立する:

$$(1.1) \quad \langle R(e_i, \bar{e}_j)e_k, \bar{e}_l \rangle = \frac{\tilde{c}}{2} (\delta_{ij}\delta_{kl} + \delta_{il}\delta_{jk}) - \langle h(e_i, e_k), h(\bar{e}_j, \bar{e}_l) \rangle,$$

$$(1.2) \quad h(e_i, e_j, e_k) = h(e_j, e_i, e_k) = h(e_i, e_k, e_j), \quad h(e_i, e_j, \bar{e}_k) = 0,$$

$$(1.3) \quad h(e_i, e_j, e_k, \bar{e}_l) = \frac{\tilde{c}}{2} \{ \delta_{il} h(e_j, e_k) + \delta_{jl} h(e_k, e_i) + \delta_{kl} h(e_i, e_j) \} \\ - \sum_{s=1}^n \langle h(e_i, e_j), h(\bar{e}_l, \bar{e}_s) \rangle h(e_k, e_s) \\ - \sum_{s=1}^n \langle h(e_j, e_k), h(\bar{e}_l, \bar{e}_s) \rangle h(e_i, e_s) \\ - \sum_{s=1}^n \langle h(e_k, e_i), h(\bar{e}_l, \bar{e}_s) \rangle h(e_j, e_s),$$

ここで  $\{e_1, \dots, e_n\}$  は  $T_p M^+$  の unitary frame である。

(1.1), (1.2) はそれぞれ Gauss の方程式 Codazzi の方程式であり,

(1.3) は [2] の Lemma 2.1 の特別な場合である。

埋め込みの shape operator を  $A \in C^\infty(\text{Hom}(NM \otimes TM, TM))$

とする。  $A$  と  $\omega$  の基本形式  $\omega$  とは  $\langle A_{\bar{z}} x, y \rangle = \langle h(x, y), \bar{z} \rangle$

$x, y \in T_p M$ ,  $\bar{z} \in N_p M$  という関係があり, また  $A_{J\bar{z}} = JA_{\bar{z}}$ ,

$A_{\bar{z}} J = -JA_{\bar{z}}$  が成立する。 Shape operator  $A$  も複素線形に拡張しておく。この時次が成立する:

$$A_{\bar{z}}(T_p M^+) \subset T_p M^-, \quad A_{\bar{z}}(T_p M^-) = \{0\}$$

$$A_{\bar{z}}(T_p M^+) = \{0\}, \quad A_{\bar{z}}(T_p M^-) \subset T_p M^+$$

$$\overline{A_{\bar{z}} x} = A_{\bar{z}} \bar{x} \quad \text{for } x \in T_p M^+, \bar{z} \in N_p M^+.$$

従って  $A_{\bar{z}}$  は  $T_p M^+$  から  $T_p M^-$  への線形作用素,  $A_{\bar{z}}$  は  $T_p M^-$  から  $T_p M^+$  への線形作用素と見なすことができる。  $A_{\bar{z}}^*$ ,  $A_{\bar{z}}$  をそれぞれ  $A_{\bar{z}}$ ,  $A_{\bar{z}}$  の共役作用素とすると,  $A_{\bar{z}}^* = A_{\bar{z}}$ ,  $A_{\bar{z}}^* = A_{\bar{z}}$  となる。従って  $A_{\bar{z}} A_{\bar{z}}$  は  $T_p M^+$  の半正定値 Hermite 作用素となり, 正または零の固有値をもち, 異なる固有値に対する固有ベクトルは互いに直交している。次の事実は容易に確かめられるであろう。

Lemma 1.1.  $\mu_1, \dots, \mu_l$  を  $A_{\bar{z}} A_{\bar{z}}$  の互いに異なる固有値,

$V_j$  ( $j=1, \dots, l$ ) をその固有空間とする。この時,  $\bar{V}_j$  は固有値  $\mu_j$

をもつ  $A_{\bar{z}} A_z$  の固有ベクトル空間である。さらに次が成立する。

$$A_{\bar{z}} V_j \subset \bar{V}_j, \quad A_z \bar{V}_j \subset V_j.$$

もうひとつ テンソル場を準備する。テンソル場  $T \in C^0(\text{Hom}(\otimes^2 NM, \mathbb{R}))$  を次で定義する：

$$\begin{aligned} T(z, \bar{z}) &= \text{tr}(A_{\bar{z}} A_z) \\ &= \sum_{i=1}^{2N} \langle A_z u_i, A_{\bar{z}} u_i \rangle \quad z, \bar{z} \in N_p M. \end{aligned}$$

ここで,  $\{u_1, \dots, u_{2N}\}$  は  $T_p M$  の orthonormal frame である。

$T$  は,  $N_p M$  の 対称双 - 次形式で,  $T(Jz, J\bar{z}) = T(z, \bar{z})$  が成立する。 $T$  を複素線形に拡張しておく。 $T$  から 線形作用素  $\tilde{T} : N_p M^+ \rightarrow N_p M^+$  を次で定義する：

$$(z, \tilde{T}(\bar{z})) = T(z, \bar{z}) \quad z, \bar{z} \in N_p M^+.$$

この時  $\tilde{T}$  は  $N_p M^+$  の 半正定値 Hermite 作用素であり,  $N_p M^+$  の unitary frame  $\{\eta^1, \dots, \eta^r\}$  と 正または零の  $a_1, \dots, a_r$  が存在して,  $\tilde{T}(\eta^\alpha) = a_\alpha \eta^\alpha \quad \alpha=1, \dots, r$  とできる。従って  $T(\eta^\alpha, \bar{\eta}^\beta) = a_\alpha \delta_{\alpha\beta}$  となり, さらに

$$\sum_{\alpha=1}^r a_\alpha = \sum_{\alpha=1}^r T(\eta^\alpha, \bar{\eta}^\alpha) = \sum_{\alpha=1}^r \sum_{i=1}^n \langle A_{\eta^\alpha} A_{\bar{\eta}^\alpha} e_i, \bar{e}_i \rangle = \sum_{i,j=1}^n \langle h(e_i, e_j), h(\bar{e}_i, \bar{e}_j) \rangle$$



が成立する。

Lemma 1.2. ある非負定数  $k$  が存在して  $M$  上の任意の点

$p$  で  $T(\xi, \bar{\eta}) = k \langle \xi, \bar{\eta} \rangle \quad \xi, \eta \in N_p M^+ \quad$  が成立しているとする。

この時

$$\sum_{i,j=1}^n \langle h(\bar{e}_i, \bar{e}_j), \xi \rangle \langle h(e_i, e_j, x), \bar{\eta} \rangle = 0, \quad \xi, \eta \in N_p M^+, x \in T_p M^+,$$

が成立する。

$$\text{証.} \quad T(\xi, \bar{\eta}) = \sum_{i=1}^n \langle A_\xi A_{\bar{\eta}} e_i, \bar{e}_i \rangle = \sum_{i,j=1}^n \langle h(\bar{e}_i, \bar{e}_j), \xi \rangle \langle h(e_i, e_j), \bar{\eta} \rangle$$

$$\text{であるから, 仮定により} \quad \sum_{i,j=1}^n \langle h(\bar{e}_i, \bar{e}_j), \xi \rangle \langle h(e_i, e_j), \bar{\eta} \rangle = k \langle \xi, \bar{\eta} \rangle$$

が成立する。両辺を  $x \in T_p M^+$  で微分して, Lemma 1.2 を得る。

## 2. 定理の証明

最初に複素空間内の Einstein Kaehler 部分多様体について成立する諸公式をまとめておこう。

Lemma 2.1.  $M$  を  $\tilde{M}^{n+r}(\tilde{c})$  内の  $n (\geq 2)$  次元 Einstein Kaehler

部分多様体とし,  $S$  を  $M$  の scalar 曲率とする。この時次が成立する:

$$(1) \quad \|h\|^2 = 2 \sum_{i,j=1}^n \langle h(e_i, e_j), h(\bar{e}_i, \bar{e}_j) \rangle = n(n+1)\tilde{c} - S$$

$$(2) \sum_{j=1}^n \langle h(e_j, x), h(\bar{e}_j, \bar{u}) \rangle = k \langle x, \bar{u} \rangle, \quad \text{ここで } k = \frac{n(n+1)\tilde{c} - \tilde{s}}{2n}$$

$$(2') \sum_{\alpha=1}^r A_{\xi^\alpha} A_{\bar{\xi}^\alpha} = k I, \quad \text{ここで } I \text{ は } T_p M^+ \text{ の恒等写像を表す。}$$

$$(3) \sum_{j=1}^n \langle h(e_j, x, y), h(\bar{e}_j, \bar{u}) \rangle = 0$$

$$(4) \sum_{j=1}^n \langle h(e_j, x, y), h(\bar{e}_j, \bar{u}, \bar{v}) \rangle$$

$$= -\frac{\tilde{c}}{2} k \{ \langle x, \bar{u} \rangle \langle y, \bar{v} \rangle + \langle x, \bar{v} \rangle \langle y, \bar{u} \rangle \} + (k - \frac{\tilde{c}}{2}) \langle h(x, y), h(\bar{u}, \bar{v}) \rangle$$

$$+ \sum_{\alpha, \beta=1}^r \langle A_{\bar{\xi}^\alpha} x, A_{\xi^\beta} \bar{u} \rangle \langle A_{\bar{\xi}^\beta} y, A_{\xi^\alpha} \bar{v} \rangle$$

$$+ \sum_{\alpha, \beta=1}^r \langle A_{\xi^\alpha} x, A_{\xi^\beta} \bar{v} \rangle \langle A_{\bar{\xi}^\beta} y, A_{\bar{\xi}^\alpha} \bar{u} \rangle$$

$\{e_1, \dots, e_n\} : T_p M^+$  の unitary frame,  $\{\xi^1, \dots, \xi^r\} : N_p M^+$  の unitary frame,  
 $x, y, u, v \in T_p M^+$ 。

証. (1) と (2) は (1.1) から直接得られる。(2)' は (2) と同値な式。(2) を  $y$  で微分して (3) が得られる。さらに (3) を  $\bar{v}$  で微分して

$$\sum_{j=1}^n \langle h(e_j, x, y), h(\bar{e}_j, \bar{u}, \bar{v}) \rangle + \sum_{j=1}^n \langle h(e_j, x, y, \bar{v}), h(\bar{e}_j, \bar{u}) \rangle = 0$$

を得る。この式の右辺 2 項を (1.3) を使って書きかえることにより、(4) が得られる。

以後余次元 2 の場合のみを考えることにする。

Lemma 2.2.  $M$  を  $\tilde{M}^{n+2}(\tilde{c})$  内の  $n (\geq 2)$  次元 Einstein Kaehler 部分多様体とする。この時、各点  $p \in M$  に対して次のような性質をもつ  $T_p M$  の unitary frame  $\{e_1, \dots, e_n\}$  が存在する。即ち  $N_p M$  の任意の unitary frame  $\{\xi, \eta\}$  に対して、複素数  $a_1, \dots, a_n$  と  $0 \leq \lambda_j \leq k$  ( $k$  は Lemma 2.1 (2) で与えられた定数) なる実数  $\lambda_1, \dots, \lambda_n$  が存在して次を満たす:

$$A_{\xi} A_{\bar{\xi}} e_j = \lambda_j e_j, \quad A_{\eta} A_{\bar{\eta}} e_j = (k - \lambda_j) e_j$$

$$A_{\eta} A_{\bar{\xi}} e_j = a_j e_j, \quad A_{\xi} A_{\bar{\eta}} e_j = \bar{a}_j e_j$$

$$a_j \bar{a}_j = \lambda_j (k - \lambda_j) \quad .$$

証.  $N_p M$  の unitary frame  $\{\xi, \eta\}$  を 1, 固定する。

Lemma 2.1 (2)' により,  $A_{\xi} A_{\bar{\xi}} + A_{\eta} A_{\bar{\eta}} = k I$  が成立する。  $\mu_1, \dots, \mu_{\ell}$  を  $A_{\xi} A_{\bar{\xi}}$  の互いに異なる固有値,  $V_j$  ( $1 \leq j \leq \ell$ ) を固有値  $\mu_j$  の固有空間,  $m(j) = \dim V_j$  とする。この時  $V_j$  は  $A_{\eta} A_{\bar{\eta}}$  の固有空間となり, その固有値は  $k - \mu_j$  ( $1 \leq j \leq \ell$ ) である。

Lemma 1.1 により,  $A_{\bar{\xi}} V_j \subset \bar{V}_j$ ,  $A_{\xi} \bar{V}_j \subset V_j$ ,  $A_{\bar{\eta}} V_j \subset \bar{V}_j$ ,  $A_{\eta} \bar{V}_j \subset V_j$  が成立する。  $j$  ( $1 \leq j \leq \ell$ ) を 1, 固定して線形作用素  $A_{\bar{\xi}}, A_{\bar{\eta}}$  を  $V_j$  に,  $A_{\xi}, A_{\eta}$  を  $\bar{V}_j$  にそれぞれ制限して考える。それぞれの共役作用素は次で与えられる:

$$A_{\bar{\xi}}^* = A_{\xi}, \quad A_{\bar{\eta}}^* = A_{\eta}, \quad A_{\xi}^* = A_{\bar{\xi}}, \quad A_{\eta}^* = A_{\bar{\eta}} \quad .$$

$V_j$  から  $V_j$  への線形作用素  $A_\eta A_{\bar{\eta}}, A_{\bar{\eta}} A_\eta$  は  $(A_\eta A_{\bar{\eta}})^* = A_{\bar{\eta}} A_\eta$ ,  
 $(A_{\bar{\eta}} A_\eta)^* = A_\eta A_{\bar{\eta}}$  を満たし,  $A_\eta A_{\bar{\eta}}, A_{\bar{\eta}} A_\eta$  は  $V_j$  の正規作用素で  
 ある。実際  $(A_\eta A_{\bar{\eta}})^* (A_\eta A_{\bar{\eta}}) = A_{\bar{\eta}} (A_\eta A_\eta) A_{\bar{\eta}} = \mu_j (k - \mu_j) I$  であり,  
 $(A_{\bar{\eta}} A_\eta) (A_\eta A_{\bar{\eta}})^* = A_{\bar{\eta}} (A_{\bar{\eta}} A_{\bar{\eta}}) A_\eta = \mu_j (k - \mu_j) I$  であるから,  $V_j$  上で  
 $(A_\eta A_{\bar{\eta}})^* (A_\eta A_{\bar{\eta}}) = (A_\eta A_{\bar{\eta}}) (A_\eta A_{\bar{\eta}})^* = \mu_j (k - \mu_j) I$  である。従って,  
 $V_j$  の unitary frame  $\{e_1^j, \dots, e_{m(j)}^j\}$  と複素数  $a_1^j, \dots, a_{m(j)}^j$  が  
 存在して,  $A_\eta A_{\bar{\eta}} e_s^j = a_s^j e_s^j$ ,  $A_{\bar{\eta}} A_\eta e_s^j = \bar{a}_s^j e_s^j$ ,  $a_s^j \bar{a}_s^j = \mu_j (k - \mu_j)$  を  
 満たす。添字の番号を取り換えて,  $N_p M^+$  の unitary frame  $\{e_1, \dots, e_n\}$   
 複素数  $a_1, \dots, a_n$ , 実数  $\lambda_1, \dots, \lambda_n$  で, 最初に固定した  $N_p M^+$  の unitary  
 frame  $\{\xi, \eta\}$  に対して

$$A_{\bar{\eta}} A_{\bar{\xi}} e_j = \lambda_j e_j, \quad A_\eta A_{\bar{\eta}} e_j = (k - \lambda_j) e_j$$

$$A_\eta A_{\bar{\xi}} e_j = a_j e_j, \quad A_{\bar{\eta}} A_\eta e_j = \bar{a}_j e_j$$

$$a_j \bar{a}_j = \lambda_j (k - \lambda_j)$$

を満たすものを得る。

次に  $N_p M^+$  における任意の unitary frame を  $\{\xi', \eta'\}$  とす  
 る。この時, 先に固定した unitary frame  $\{\xi, \eta\}$  を使って, 次のように  
 表示することができる:

$$\xi' = e^{i\phi} (z\xi - \bar{w}\eta), \quad \eta' = e^{i\phi} (w\xi + \bar{z}\eta),$$

ここで  $\phi \in \mathbb{R}$ ,  $z, w \in \mathbb{C}$  かつ  $z\bar{z} + w\bar{w} = 1$  を満たす。

直接計算することによつて, 次を得る:

$$A_{\tilde{z}}, A_{\tilde{z}}, e_j = \{ z \bar{z} \lambda_j - z w \bar{a}_j - \bar{z} \bar{w} a_j + w \bar{w} (k - \lambda_j) \} e_j$$

$$A_{\tilde{z}}, A_{\tilde{z}}, e_j = \{ w \bar{w} \lambda_j + z w \bar{a}_j + \bar{z} \bar{w} a_j + z \bar{z} (k - \lambda_j) \} e_j$$

$$A_{\tilde{z}}, A_{\tilde{z}}, e_j = \{ \bar{z} w (2\lambda_j - k) + \bar{z}^2 a_j - w^2 \bar{a}_j \} e_j$$

$$A_{\tilde{z}}, A_{\tilde{z}}, e_j = \{ z \bar{w} (2\lambda_j - k) + z^2 \bar{a}_j - \bar{w}^2 a_j \} e_j.$$

以上の議論によつて Lemma 2.2 は示された。

Lemma 2.3.  $\{e_1, \dots, e_n\}$  を Lemma 2.2 で与えられた unitary frame とする。添字の番号  $i$  ( $1 \leq i \leq n$ ) を固定した時,  $N_p M^+$  の unitary frame  $\{\xi, \eta\}$  で  $A_{\tilde{z}} A_{\tilde{z}} e_i = k e_i$ ,  $A_{\tilde{z}} A_{\tilde{z}} e_i = A_{\tilde{z}} A_{\tilde{z}} e_i = A_{\tilde{z}} A_{\tilde{z}} e_i = 0$  とするものが選ぶことができる。

証. Lemma 2.2 の証明中で,  $N_p M^+$  の unitary frame の交換をうまくとればよい。

以上の準備のもとに  $\tilde{c} > 0$  の場合に定理を証明しよう。最初に Lemma 2.1 の中の定数  $k$  について gap phenomenon があることを示そう。Lemma 2.1 (4) によつて,

$$\begin{aligned} & \sum_{i,j,l=1}^n \langle h(e_i, e_j, e_l), h(\bar{e}_i, \bar{e}_j, \bar{e}_l) \rangle \\ &= -\frac{1}{2} n(n+1) \tilde{c} k + n k (k - \frac{\tilde{c}}{2}) + n k^2 + \sum_{\alpha, \beta=1}^r T(\tilde{\xi}^\alpha, \tilde{\xi}^\beta) T(\tilde{\xi}^\beta, \tilde{\xi}^\alpha) \end{aligned}$$

を得る。第1節の後半の議論によつて,  $N_p M^+$  の unitary frame

$\{\eta^1, \dots, \eta^r\}$  が存在して,  $T(\bar{\eta}^\alpha, \eta^\beta) = a_\alpha \delta_{\alpha\beta}$  とできる。従って,

$$\begin{aligned} \sum_{\alpha, \beta=1}^r T(\bar{\xi}^\alpha, \xi^\beta) T(\bar{\xi}^\beta, \xi^\alpha) &= \sum_{\alpha, \beta=1}^r T(\bar{\eta}^\alpha, \eta^\beta) T(\bar{\eta}^\beta, \eta^\alpha) \\ &= \sum_{\alpha=1}^r a_\alpha^2 \leq \left( \sum_{\alpha=1}^r a_\alpha \right)^2 = n^2 k^2 \end{aligned}$$

が成立する。

結局 次の不等式が得られる:

$$\sum_{i,j,l=1}^n \langle h(e_i, e_j, e_l), h(\bar{e}_i, \bar{e}_j, \bar{e}_l) \rangle \leq n(n+2)k(k - \frac{\tilde{c}}{2}) .$$

上の不等式の左辺は非負であるから,  $k > 0$  ならば  $k \geq \frac{\tilde{c}}{2}$  であり, さらに  $k = \frac{\tilde{c}}{2}$  ならば, 第2基本形式が平行となる。この事実  
は任意の余次元  $r$  で成立するから, 特に余次元 2 でも成立する。

以上の議論によ, 次の3つの場合を考察すれば十分であることが分る:

Case 1.  $k = 0$ ,

Case 2.  $k = \frac{\tilde{c}}{2}$ ,

Case 3.  $k > \frac{\tilde{c}}{2}$ .

Case 1. Lemma 2.1 (2) によ,  $M$  は totally geodesic.

Case 2. この場合 第2基本形式は平行である。複素空間  
形内の第2基本形式が平行な Kähler 部分多様体は H. Nakagawa

and R. Takagi [2] によって完全に分類されている。その中で我々の仮定にあてはまるものは,  $P_{n+2}(\mathbb{C})$  に totally geodesic に埋め込まれた  $P_{n+2}(\mathbb{C})$  内の複素 2 次超曲面のみである。

Case 3. この場合は起りえない。以下この事実を証明しよう。

このため記号をいくつか準備しよう。  $T_p M^+$  から  $N_p M^+$  への線形作用素からなる複素ベクトル空間を  $\text{Hom}(T_p M^+, N_p M^+)$  で表すことにする。  $\text{Hom}(T_p M^+, N_p M^+)$  における Hermite 内積  $(\cdot, \cdot)$  を次のように定義する:

$$(A, B) = \sum_{i=1}^n (A(e_i), B(e_i)) = \sum_{i=1}^n \langle A(e_i), \overline{B(e_i)} \rangle$$

ここで  $A, B \in \text{Hom}(T_p M^+, N_p M^+)$ ,  $\{e_1, \dots, e_n\}: T_p M^+$  の unitary frame。

$T_p M^+$  の対称テンソル積のなす空間を  $T_p M^+ \cdot T_p M^+$  で表す。

$T_p M^+ \cdot T_p M^+$  は  $x \cdot y = \frac{1}{2} \{x \otimes y + y \otimes x\}$   $x, y \in T_p M^+$  で張られている。

$T_p M^+ \cdot T_p M^+$  に次のようにして Hermite 内積  $(\cdot, \cdot)$  を導入する:

$$\begin{aligned} (x \cdot y, u \cdot v) &= \frac{1}{2} \{ (x, u)(y, v) + (x, v)(y, u) \} \\ &= \frac{1}{2} \{ \langle x, \bar{u} \rangle \langle y, \bar{v} \rangle + \langle x, \bar{v} \rangle \langle y, \bar{u} \rangle \} \end{aligned}$$

線形写像  $H^2: T_p M^+ \rightarrow \text{Hom}(T_p M^+, N_p M^+)$ ,  $H^3: T_p M^+ \cdot T_p M^+ \rightarrow$

$\text{Hom}(T_p M^+, N_p M^+)$  をそれぞれ次のように定義する:

$$H^2(x)(u) = h(u, x), \quad H^3(x, y)(u) = h(u, x, y).$$

$T_p M^+ \cdot T_p M^+$  上に線形作用素  $L, Q$  を導入する。最初  $L$  を次で定義する：

$$\begin{aligned} (L(x, y), u \cdot v) &= -\tilde{c} k(x, y, u \cdot v) \\ &+ \sum_{\alpha, \beta=1}^2 (A_{\xi^\beta} A_{\bar{\xi}^\alpha} x, u) (A_{\bar{\xi}^\alpha} A_{\xi^\beta} y, v) + \sum_{\alpha, \beta=1}^2 (A_{\xi^\beta} A_{\bar{\xi}^\alpha} x, v) (A_{\bar{\xi}^\alpha} A_{\xi^\beta} y, u) \\ &= -\frac{\tilde{c}}{2} k \{ \langle x, \bar{u} \rangle \langle y, \bar{v} \rangle + \langle x, \bar{v} \rangle \langle y, \bar{u} \rangle \} \\ &+ \sum_{\alpha, \beta=1}^2 \langle A_{\xi^\beta} A_{\bar{\xi}^\alpha} x, \bar{u} \rangle \langle A_{\bar{\xi}^\alpha} A_{\xi^\beta} y, \bar{v} \rangle + \sum_{\alpha, \beta=1}^2 \langle A_{\xi^\beta} A_{\bar{\xi}^\alpha} x, \bar{v} \rangle \langle A_{\bar{\xi}^\alpha} A_{\xi^\beta} y, \bar{u} \rangle, \end{aligned}$$

ここで  $\{\xi^1, \xi^2\}$  は  $N_p M^+$  の unitary frame である。

この定義は  $N_p M^+$  の unitary frame のとりかたによらない。また  $L$  は  $T_p M^+ \cdot T_p M^+$  上の Hermite 作用素である。次に  $Q$  を,

$$(Q(x, y), u \cdot v) = (h(x, y), h(u, v)) = \langle h(x, y), h(\bar{u}, \bar{v}) \rangle$$

で定義する。 $Q$  は 半正定値 Hermite 作用素である。これらの記号を使って Lemma 2.1 (4) 式は次のように表わせる：

$$(H^3(x, y), H^3(u, v)) = (\{L + (k - \frac{\tilde{c}}{2})Q\}(x, y), u \cdot v).$$

Lemma 2.2 を利用して、次を得る。

Lemma 2.4  $\{e_1, \dots, e_n\}$  を Lemma 2.2 で与えられた  $T_p M^+$  の unitary frame とする。この時 次が成立する：



$$(L(e_i \cdot e_i), e_j \cdot e_j) = k(2k - \tilde{c}) \delta_{ij}$$

$$(L(e_i \cdot e_i), e_j \cdot e_l) = 0 \quad j \neq l \quad .$$

Lemma 2.5  $\{e_1, \dots, e_n\}$  を Lemma 2.2 で与えられた  $T_p M^+$  の unitary frame とする。  $k > \frac{\tilde{c}}{2}$  ならば  $\text{Hom}(T_p M^+, N_p M^+)$  は  $H^2(e_i)$ ,  $H^3(e_i \cdot e_i)$  ( $i=1, \dots, n$ ) で張られている。

証. Lemma 2.1 (2) によつて,  $(H^2(e_i), H^2(e_j)) = k \delta_{ij}$  とおから,  $H^2(e_1), \dots, H^2(e_n)$  は  $\text{Hom}(T_p M^+, N_p M^+)$  の中で 1 次独立である。  $e_i \cdot e_i, \dots, e_n \cdot e_n$  で張られる  $T_p M^+ \cdot T_p M^+$  の部分空間を  $W$  とする。 Lemma 2.4 によつて  $W$  は  $L$  の不変部分空間である。 さらに  $k > \frac{\tilde{c}}{2}$  ならば  $L$  は  $W$  で正定値である。  $Q$  と同様に  $W$  上の作用素を  $Q'$  とおく。  
 $k > \frac{\tilde{c}}{2}$  ならば  $L + (k - \frac{\tilde{c}}{2})Q'$  は  $W$  上の正定値 Hermite 作用素である。従つて  $H^3$  を  $W$  に制限すれば単射であり,  $H^3(e_i \cdot e_i), \dots, H^3(e_n \cdot e_n)$  は 1 次独立である。 Lemma 2.1 (3) によつて,  $(H^2(e_j), H^3(x \cdot y)) = 0 \quad x, y \in T_p M^+$ 。従つて  $H^2(e_1), \dots, H^2(e_n), H^3(e_1 \cdot e_1), \dots, H^3(e_n \cdot e_n)$  は  $\text{Hom}(T_p M^+, N_p M^+)$  で 1 次独立である。一方  $\dim \text{Hom}(T_p M^+, N_p M^+) = 2n$  であるから, Lemma 2.5 の主張は示された。

Lemma 2.6.  $\{e_1, \dots, e_n\}$  を Lemma 2.2 で与えられた  $T_p M^+$  の unitary frame とする。  $k > \frac{\tilde{c}}{2}$  の時 次の成立する。

$$(1) \quad h(e_i, e_j) = 0 \quad i \neq j$$

$$(h(e_i, e_i), h(e_j, e_j)) = \langle h(e_i, e_i), h(\bar{e}_j, \bar{e}_j) \rangle = k \delta_{ij}$$

$$(2) \quad h(x, e_i, e_j) = 0 \quad i \neq j \quad \text{any } x \in T_p M^+$$

$$(h(e_i, e_i, e_i), h(e_i, e_i, e_i)) = \langle h(e_i, e_i, e_i), h(\bar{e}_i, \bar{e}_i, \bar{e}_i) \rangle = \frac{3}{2} k(2k-2).$$

証.  $i$  を 1 に固定する. Lemma 2.3 1)より  $N_p M^+$  の unitary frame  $\{\bar{e}_j\}$  が存在して, 次を満たす:

$$A_{\bar{e}_j} A_{\bar{e}_j} e_j = \lambda_j e_j, \quad A_{\bar{e}_j} A_{\bar{e}_j} e_j = (k - \lambda_j) e_j,$$

$$A_{\bar{e}_j} A_{\bar{e}_j} e_j = a_j e_j, \quad A_{\bar{e}_j} A_{\bar{e}_j} e_j = \bar{a}_j e_j,$$

$$a_j \bar{a}_j = \lambda_j (k - \lambda_j),$$

$$\text{そして特に } \lambda_i = k, \quad a_i = 0.$$

最初に  $j \neq i$  となる  $j$  について  $\lambda_j \neq k$  であることを示そう。

もしある  $j \neq i$  について  $\lambda_j = k$  が成立したとする。この時

$$(L(e_i \cdot e_j), e_i \cdot e_j) = k(k - \frac{3}{2}) \text{ である。 } e_1 \cdot e_1, \dots, e_n \cdot e_n \text{ と } e_i \cdot e_j \text{ で張}$$

られた  $T_p M^+ \cdot T_p M^+$  の部分空間を  $W'$  とする。Lemma 2.4 によ

って  $L$  は  $W'$  上の正定値 Hermite 作用素である。Lemma 2.5

と同じ議論によつて,  $H^2(e_1), \dots, H^2(e_n), H^3(e_1 \cdot e_1), \dots, H^3(e_n \cdot e_n),$

$H^3(e_i \cdot e_j)$  は  $\text{Hom}(T_p M^+, N_p M^+)$  で 1 次独立である。これは矛盾。

従つて  $j \neq i$  ならば  $\lambda_j \neq k$ 。Lemma 1.1 によつて  $\langle A_{\bar{e}_j} e_i, e_j \rangle =$

$$\langle A_{\bar{e}_j} e_i, e_j \rangle = 0 \text{ 従つて } h(e_i, e_j) = 0 \text{ となる。このことによつて,}$$

$$\langle h(e_i, e_i), h(\bar{e}_i, \bar{e}_i) \rangle = \sum_{j=1}^n \langle h(e_j, e_i), h(\bar{e}_j, \bar{e}_i) \rangle = k \text{ が得られる。}$$

さらに  $j \neq i$  とする  $j$  について次が成立する:

$$\begin{aligned} (H^3(e_i \cdot e_j), H^3(e_i \cdot e_j)) &= (L(e_i \cdot e_j), e_i \cdot e_j) + (k - \frac{\check{\epsilon}}{2}) (h(e_i, e_j), h(e_i, e_j)) \\ &= (L(e_i \cdot e_j), e_i \cdot e_j) = k(\lambda_j - \frac{\check{\epsilon}}{2}). \end{aligned}$$

上式の左辺は非負であるから,  $\lambda_j \geq \frac{\check{\epsilon}}{2}$  とする。もし  $\lambda_j > \frac{\check{\epsilon}}{2}$  とする。先と同じ議論で,  $H^2(e_1), \dots, H^2(e_n), H^3(e_1 \cdot e_1), \dots, H^3(e_n \cdot e_n), H^2(e_i \cdot e_j)$  は 1 次独立と存して矛盾。従って  $\lambda_j = \frac{\check{\epsilon}}{2}$  であり,  $H^3(e_i \cdot e_j) = 0$  である。このことは任意の  $x \in T_p M^+$  について,  $h(x, e_i, e_j) = 0$  である。

Lemma 2.4 によつて次を得る:

$$\begin{aligned} (H^3(e_i \cdot e_i), H^3(e_j \cdot e_j)) &= (L(e_i \cdot e_i), e_j \cdot e_j) + (k - \frac{\check{\epsilon}}{2}) (h(e_i, e_i), h(e_j, e_j)) \\ &= (k - \frac{\check{\epsilon}}{2}) \langle h(e_i, e_i), h(\bar{e}_j, \bar{e}_j) \rangle \\ &\quad j \neq i. \end{aligned}$$

$$\text{一方 } (H^3(e_i \cdot e_i), H^3(e_j \cdot e_j)) = \sum_{s=1}^n \langle h(e_s, e_i, e_i), h(\bar{e}_s, \bar{e}_j, \bar{e}_j) \rangle = 0$$

であるから,  $\langle h(e_i, e_i), h(\bar{e}_j, \bar{e}_j) \rangle = 0 \quad j \neq i$  を得る。

最後に,

$$\begin{aligned} &\langle h(e_i, e_i, e_i), h(\bar{e}_i, \bar{e}_i, \bar{e}_i) \rangle \\ &= \sum_{s=1}^n \langle h(e_s, e_i, e_i), h(\bar{e}_s, \bar{e}_i, \bar{e}_i) \rangle \\ &= (L(e_i \cdot e_i), e_i \cdot e_i) + (k - \frac{\check{\epsilon}}{2}) \langle h(e_i, e_i), h(\bar{e}_i, \bar{e}_i) \rangle \end{aligned}$$

$$= k(2k - \tilde{c}) + k(k - \frac{\tilde{c}}{2}) = \frac{3}{2}k(2k - \tilde{c})$$

を得る。以上で Lemma 2.6 はすべて示された。

Lemma 2.6 で示された事実を使って,  $k > \frac{\tilde{c}}{2}$  の場合が起り得ないことを示そう。  $n = \dim M \geq 3$  で  $k > \frac{\tilde{c}}{2}$  とすると, Lemma 2.6

(1) により,  $h(e_1, e_1), h(e_2, e_2), h(e_3, e_3)$  が  $N_p M^+$  で 1 次独立である。

これは余次元 2 という仮定に反する。従ってこの場合は起り

得ない。次に  $n = \dim M = 2$  の場合を考察しよう。  $k > \frac{\tilde{c}}{2}$

ならば  $T(\xi, \bar{\eta}) = k \langle \xi, \bar{\eta} \rangle$   $\xi, \bar{\eta} \in N_p M^+$  が成立する。実際。

$\xi = \frac{1}{\sqrt{k}} h(e_1, e_1)$ ,  $\eta = \frac{1}{\sqrt{k}} h(e_2, e_2)$  とおけば, Lemma 2.6 (1) により,

$\{\xi, \eta\}$  は  $N_p M^+$  の unitary frame であり, 次を満たしている:

$$A_{\xi} e_1 = \sqrt{k} \bar{e}_1, A_{\xi} \bar{e}_1 = \sqrt{k} e_1, A_{\xi} e_2 = A_{\xi} \bar{e}_2 = 0,$$

$$A_{\eta} e_2 = \sqrt{k} \bar{e}_2, A_{\eta} \bar{e}_2 = \sqrt{k} e_2, A_{\eta} e_1 = A_{\eta} \bar{e}_1 = 0.$$

このことにより,  $T(\xi, \bar{\xi}) = T(\eta, \bar{\eta}) = k$  で  $T(\xi, \bar{\eta}) = T(\eta, \bar{\xi}) = 0$

が成立する。このことは  $T(\xi', \bar{\eta}') = k \langle \xi', \bar{\eta}' \rangle$  for  $\xi', \eta' \in N_p M^+$

$p \in M$  を意味する。

Lemma 1.2 により,  $\sum_{i,j=1}^2 \langle h(\bar{e}_i, \bar{e}_j), \xi \rangle \langle h(e_i, e_j, x), \bar{\eta} \rangle = 0$  が成立。

特に  $\sum_{i,j=1}^2 \langle h(\bar{e}_i, \bar{e}_j), h(e_1, e_1) \rangle \langle h(e_i, e_j, e_1), h(\bar{e}_1, \bar{e}_1) \rangle$

$$= \sum_{i,j=1}^2 \langle h(\bar{e}_i, \bar{e}_j), h(e_1, e_1) \rangle \langle h(e_i, e_j, e_1), h(\bar{e}_2, \bar{e}_2) \rangle = 0$$

が成り立つ。

Lemma 2.6 によ, て 次を得る:

$$\begin{aligned} 0 &= \sum_{i,j=1}^2 \langle h(\bar{e}_i, \bar{e}_j), h(e_i, e_1) \rangle \langle h(e_i, e_j, e_1), h(\bar{e}_1, \bar{e}_1) \rangle \\ &= \langle h(\bar{e}_1, \bar{e}_1), h(e_1, e_1) \rangle \langle h(e_1, e_1, e_1), h(\bar{e}_1, \bar{e}_1) \rangle \\ &= k \langle h(e_1, e_1, e_1), h(\bar{e}_1, \bar{e}_1) \rangle \quad . \end{aligned}$$

従, て  $\langle h(e_1, e_1, e_1), h(\bar{e}_1, \bar{e}_1) \rangle = 0$  . 同様にして  $\langle h(e_1, e_1, e_1), h(\bar{e}_2, \bar{e}_2) \rangle = 0$  .

結局  $h(e_1, e_1, e_1) = 0$  となり,  $\langle h(e_1, e_1, e_1), h(\bar{e}_1, \bar{e}_1, \bar{e}_1) \rangle = \frac{3}{2}k(2k - \tilde{c})$  に矛盾する。以上の議論によ, て,  $\dim M = 2$  で  $k > \frac{\tilde{c}}{2}$  なる場合は起り得ないことが分る。

$\tilde{c} \leq 0$  の場合の定理の証明. 定数  $k$  が零の場合,  $M$  は totally geodesic である。  $k > 0$  ならば 明らかに  $k > \frac{\tilde{c}}{2}$  . この場合  $\tilde{c} > 0$  でかつ  $k > \frac{\tilde{c}}{2}$  の時と全く同じ議論が成立して, 起り得ないことが示される。

## 文献

- [1]. S.S. Chern, On Einstein hypersurfaces in a Kähler manifold of constant holomorphic sectional curvature, J. Differential Geometry, 1 (1967), 21-31.

- [2] H. Nakagawa and R. Takagi, On locally symmetric Kähler submanifolds in a complex projective space,  
J. Math. Soc. Japan, 28 (1976), 638-667.
- [3] K. Ogue, Differential geometry of Kähler submanifolds,  
Advances in Math., 13 (1974), 73-114.
- [4] B. Smyth, Differential geometry of complex hypersurfaces,  
Ann. of Math., 85 (1967), 246-266.